

バートンの「高校の文学教育」
について

山 本 芙 美 子

はじめに

Literature Study in the High

Schools (1960) Dwight L. Burton

この書の要約紹介をしていきたい。

一 組織と内容

目次と項目をそのまま訳出すると、次のよ

うになる。

1 文学は青年に何をなすべきか

(1) 代償経験

(3) 人開経験の探究

(3) 参考文献

2 われわれはどこで出発するか

(1) 人気のある番組や書物の基礎的魅力

(2) 上向きのはしご・過渡期文学

(3) 過渡期文学のタイプ

(4) 二つのゆきわたった興味・動物の本と

スポーツの本

(5) 動物小説

(6) スポーツについての書物

(7) 生徒の読書に可能なもの

3 冒険文学

(1) フィクションの中の海

(2) 西部物語

(3) 戦いにおける人間

(4) 科学小説

(5) 冒険実話

(6) 生徒の読書に可能なもの

4 青年教養の文学

(1) 問題の種類

(2) 個人的な問題と文学

(3) ジュニア小説の分析

(4) 個人的な問題を扱う小説の評価

(5) 代表的なジュニア小説家

(6) 個人的な問題のテーマの変化

(7) おとなのフィクションにおける青年の

問題

(8) 職業小説

(9) 生徒の読書に可能なもの

5 社会問題と文学プログラム

(1) 集団の問題を扱う小説を批評するため

の基準

(2) 十代のための文学における社会問題的

テーマ

(3) 生徒の読書に可能なもの

6 青年のためのフィクションにおける歴史

的背景

(1) 歴史とフィクションの技術

(2) 学校プログラムにおける歴史小説

(3) 青年読者のための料金

(4) 生徒の読書に可能なもの

7 文学プログラムにおけるフィクション

(1) 小説を読む技術の教育

(2) 小説への接近

(3) 文学プログラムにおける短編物語

(4) 小説の六十傑作

8 文学プログラムにおける伝記と隨筆

(1) 文学プログラムにおける伝記

(2) 伝記教育における接近

(3) ジュニアの伝記

(4) エッセイ

(5) 生徒の読書に可能なもの

9 詩教育に活力を与えること

(1) ハイスクールで詩から魔女を除くこと

(2) 生徒が有効に詩を読むよう学ぶことに

役立つこと

(3) 有用な名詩選

10 人生の鏡としての戯曲教育

(1) ドラマの読書に必要な概念と技術

(2) シェイクスピアを読む上の問題

(3) 著書目録

11 文学プログラムを作成すること

(1) 文学プログラム作成の方法

(2) 作成案を選ぶこと

(3) 能力範囲への接近

12 生徒の文学的成長を評価すること

(1) テストを使用すること

(2) 評価の他のテクニクを使うこと

以上が、本書の目次および内容であるが、次に問題を中心に、その内容を述べたい。

二 問題点

1 伝統的教育の批判

アメリカの教育にも及んでゐることがうかがわれる。それは、生徒の生活や体験を重んずる立場に、強く支えられてゐるのである。この立場は、伝統的立場と対立する、新しい教育の立場である。本書もまた、新しい教育の立場にたった書であるといえる。新しい教育方法を築きあげてゐるといえる。その具体的な姿は、以下に述べる問題点とも関係するので、ここでは省略する。

2 人生や実生活に処していくための文学教育

パートンは、文学の機能について、「代償経験としての機能において、文学は青年のアクションへの渴望や、先天的な好奇心を満足させ、時間の制限から逃避する必要があるために、じゅうぶんになすことができる。おそらく、ある意味で、文学のあらゆる機能は、代償経験の下に包含されるであらう。」と述べているが、こういう機能をもつ文学作品を読み研究して、英知を得る。また、「文学は人間経験の真実をあばくための唯一の機能をもっている。」として、青年の成長過程において、文学が重要な役割を果たすことを強調している。読書をするこゝによつて、青年は、「人間性の複雑さに気づく。価値の衝突に気づく。人間の熱望と悲劇の要素との共通性に気づく。毎日の意味深さと美しさに気づく。」ようになる。このように考えにくる

と、文学教育の目標をはつきりするであらう。すなわち、代償経験を通して、人間や人生の探究をし、人生に処していく力をつける。人間の生き方・感じ方を学び、人間性を高める。人生の善と悪・美と醜・真と偽を識別し理解する。人生の洞察を深めて、よりよい生活をいとなむ。などにまとめられるかと思ふ。あくまでも、「文学は若人がよりよい生活をするために役立たねばならない。」のであり、文学教育は、ここに重要な価値をもつようになるのである。

3 生徒の興味に即した文学教育

生徒の読書の興味を開發する立場にたつて、その興味を刺激しつゝ、読書を楽しみ、読書によつて、人生や実生活に目をむけさせるといつた文学教育である。だから、ハイスクールの文学教育の出発点は、生徒に魅力の

ある文学形態といえよう。具体的に述べるならば、読みやすいものであり、生徒の性質にふさわしいものであり、サスペンスとかミステリーとかの要素をもつものである。つまり、動物物語とか、スポーツ小説とか、冒険物語などである。出発点に、こういう文学形態を置き、それを土台として、次の文学形態へと發展させるといふ、考え方をしている。

「詩は生徒には人気がないが、詩の読書では興味と技術はいっしょである。生徒が興味をもてばもつほど、読む技術を發展させていく、そして、技術が巧みになればなるほど、詩の読書に興味をもつようになるから、詩教育では、まず、生徒の積極的な態度を確立し、興味をかりたてねばならない。生徒と詩とを関係づけることがたいせつである。」としてゐることも明らかのように、与えられる教材も、またその機会も、生徒の興味にそつたものである。この点で、本書は、生徒の興味に即した文学教育を強調していると考えられる。

4 生徒の生活体験を重視した文学教育

青年期は、疑問を発したり、不安に思つたり、絶望したりという時代である。この時期

には、さまざまな問題に直面する。たとえ
ば、自己自身の問題、仲間、特に異性との問
題、家族、特に両親との問題、未来の成人に
対する役割の問題など。こういう個人的な問
題は、ハイスクールの文学プログラムに、重
要な意味をもってくる。生徒の個人的な問題
を解決するのに役立ち、個人の風雅な生活に
貢献し、教養文化の財産を知らせるといった
目的をもっている。

文学が、経験のたてなおしであり、生命に
も関するものであり、ぼんやりと余暇を費す
といったものではないと悟らせる機会を与え
るような、文学教育でなければならないので
ある。

この文学教育の考えかたの根底には、アメ
リカの基本的な思想が流れていると思われ
る。が、ここではそれについてはふれない。

5 その他の題

以上、問題を中心に、本書の内容を紹介し
てきたが、全体的にみると、本書は、青年の
想像文学の批判を基にし、その教育方法を詳
細に論じている。また、その文学的発展のプ
ロセスを述べている。理論だけによらず、国
語教室での経験に支えられていることは、実

踐の場で大いに役立つと思われる。

おわりに

この紹介は、一冊の書に限定されたが、ア
メリカの文学教育の一端がうかがわれると思
う。さらには、アメリカの教育の基礎にある
考えかたを追究し、その上にたつた文学教育
を考えてみなければならぬ。また、日本に
おけるそれとも考えあわせることが必要であ
らう。これらは今後の課題として残されるで
あり。

(本学三年生)

×
×
×

